

幼稚園問題に關するデュニエ氏の意見(一)

(幼稚園 六才以下の子供)

大塚 喜 一 譯

一、遊戯について

遊戯は、幼兒が外的に爲す如何なるものとも同一視せらるべきではない。それは寧ろ、全體として又統一を爲せる彼の精神的態度を指して云ふべきである。遊戯とは、幼兒のあらゆる力・思想・身體運動が彼自身の心像や興味を満足せる形に於て體現する様に、自由に相互に活動する事である。消極的には、それは經濟的壓迫——生活費を得又他人の生活を支持する必要——及成人の特殊なる職業に附帶せる定れる責任からの自由解放である。積極的には、子供の最上の(終極の)目的は成長の充實である事を遊戯は意味してゐる。即ち彼の萌え出でつゝある力の實現の充實であり、其實現によつて幼兒は一段階から他の段階へと續いて運ばれてゆくのである。

茲に論じたるは極めて一般的なる説述である。而してその一般的なるまゝに解さるればあまりに漠然として實際に適用する由もなき様である。しかし此論は、詳細なる點に於て又應用に當つては、幼稚園

の方法の全然根本的なる變化の可能性、且多くの點に於て其必要性を意味してゐる。露骨に云へば（デ
 エキ）の云ふ）「遊戯」は子供の心理的態度を表示するものであつて彼の外的に爲す事ではないといふ事
 は、あらゆる與へられたる又は豫定せられたる方策、又は恩物・遊戯・作業の順序等に從ふ必要から完全
 なる解放を意味する。公平なる教師は、フレイベルの云へる（彼の「母の遊び」の中に又其他の所々に活
 動（activities）に、又彼の弟子達に依て詳細に述べられたる所に暗示を探し求むる事はあらうが、しかし
 上述の遊戯の原理は彼に注意深く事物（註、恩物・遊戯・作業等）を研究し批評して、果して是等が彼自身
 の幼兒達に對して眞に（フレイベルの云へる）活動であるか又は過去に於て異なる社會事情の下に生活せ
 し子供達に必要であつたと思はるゝ事物であるかを決定する事を要求してゐる。作業やゲーム（遊事）等
 が、フレイベル及其當時の門人達のもを單に永久に傳へる限りに於ては、吾人は彼等に反對して明に
 次の如く云ふ、即ちフレイベルの說いた外面的事物を崇拜する事は決して彼の主義に忠實なる事にはな
 らぬと。

教師は如何なる出所から暗示を得るにも絶対に自由でなければならぬ。（註、教師は出所の如何に拘は
 れ、フ氏のものなるが故に理由なく尊重し重要視する等の事があつてはならぬ）只自らに次の二つの問
 を爲すべきである。（一）其遊戯の方法（様式）が幼兒自身のものとして氣に入るであらうか。（二）其遊戯は幼
 兒自身に何か本能的根據のあるものであつて、彼の中に表現せんと勉めてゐる能力を成熟せしむるもの

であるかと。再言すれば、其活動は、幼兒をして意識及行爲のより高き段階へと至らしむる様な發表の種類を其衝動に與ふるもので、かの單に彼を刺戟し而して彼をして以前居た所に止らしめ只一程度の神經の疲勞と將來更に刺戟を欲するの結果に止るものではないかと問ふべきである。

フレイベル氏は彼自身の時代の子供の諸遊戯や、母が其小兒と遊んだゲーム(遊事)を注意深く研究した事はあらゆる證據がある。(今より見れば其研究法は歸納的ではあつたが)「母の遊び」中に見る如く、彼は又是等の遊戯の中に重要な意義を有する原理を指摘せん事に大に苦心した。彼は、是等の遊びは子供が爲すものなるが故につまらぬ事ではなくして、却て子供の成長の基本的要素である事を、其時代の人々に知らせねばならなかつた。しかし吾人は、彼が是等の遊戯のみが意義を有するものであり又彼の哲學的説明か單に暗示せる以上に深い動機があつたものと思つてゐたと見る證據は毛頭ない。之は彼の門人達に對して、彼が集めた諸遊戯を文字通り墨守するよりも寧ろ門人達と同時代の諸事件や諸活動に適合する様彼の研究を繼續して以て更に後進者を啓發せん事を望んでゐたと吾人は信ずる。更にフレイベル自身が是等の遊戯ゲイムの説明に於て、當時應用し得られた心理學的及哲學的意見が最上のものであると思つてゐなかつたのであらう。若し氏をして今日あらしめたならば、現時の進歩した種々の心理學(一般的・實驗的・又兒童研究の如き)に對して氏は其歡迎會の先頭に立ち、其結果を利用し批評し研究して幼兒の活動を一層教育的ならしむるに努力するであらう。

フロイトの象徴主義の多くは、彼自身の生涯と事業との二つの特別なる事情の産物である事を記憶せねばならぬ。先づ第一に、當時は子供の成長發達に關する生理學的・心理的事業及原理の智識が不十分であつた爲に、彼は遊戯等に附せる價値の牽強附會な人爲的な説明に依る事を屢々餘儀なくなられた。今日では簡單な日常事として簡潔に述べべき事柄に抽象的な哲學的理由を與へたが爲に、氏の説述の多くが厄介で遠廻しな事になつたのは、公平なる觀察者には明である。第二に、當時ドイツの政治的社會的事情は一般に專制的束縛的であつたが爲に、幼稚園の自由な協働的な社交生活と斯かる外的生活との連續を考ふる事が不可能であつた。それ故氏は、教室の「作業」(Occupations)を社會生活中に含まれる道德原理の表現と見る事が出来なかつた。斯かる事情に依て氏は之を抽象的な道德的及哲學的原理の象徴と考ふるに至らしめられた。當時の此ドイツの現状に比すれば今日の米國は大に進歩したものであるから、幼稚園の活動も亦フ氏のものに比すれば一層自然的で直接的であり、又眞實なる實社會生活の寫しである事が出来る筈である。フ氏の哲學思想とドイツの政治的理想の不一致といふ事がドイツ政府をして幼稚園に疑惑を抱かしめる事となつた。一方には又幼稚園に於ける單純なる社會生活が含蓄多い智的技術と化す事になつたのである。